メルボルンるんだより

苫小牧からメルボルンに来て5年目。びとこま元編集長おごちんがお届け

メルボルンからフェリーに乗って、約10時間、タスマニア州に行って来ました。タスマニアにはユニークな博物館があります。その名も『プージアム』。プーっていうのはうんちのこと。色々な動物のうんちを展示しうんちについて世界中の様々な研究を紹介する博物館です。タスマニアの『MONA』という美術館には『プーマシン（うんち製造機）』という食べ物が消化されてうんちになるまでを科学的に再現したアート作品もある！Bonorong野生動物保護区では、ウォンバットのうんちが四角いってことを教えてもらったよ。大自然と歴史ある街並みの美しいタスマニアは、うんちのヒミツも学べるユニークなところだよ。

オーストラリアの南の島々がタスマニア。南の島っていうと暑そうだけど南極に近くて夏でも涼しい。面積は北海道より少しせまい。ほとんどの場所が国立公園や保護区。そんな大自然っぷり、牛乳や果物が美味しいところ、色々と北海道に似てる。でも、雪は山の上の方しかふらないんだって。

編集後記

2020年度最後の活動日を終え、こども記者たちは大変な一年を乗り越えました。といってもまだまだ辛抱は続きそうですが、無事29号を発行できました。毎年思うことでもありますが、今年度の記者たちの成長には目を見張るものがあります。28号と見比べても記事の面白さやイラストの観察眼は驚くほど豊かになっています。学校での不自由な生活や友達と遊べない時間には何を想っていたんでしょう。逞しくなったこども記者の活躍を本号を通してご覧ください！

びとこま 第29号（2021年2月発行）

【執　　筆】子ども広報部「びとこま」（阿部多香子、板谷果穂、小川さくら、栗本帆夏、栗本百花、田野紗彩、野本遥、原田詢矢、三浦百葉、分里心音、綿貫里咲）
NPO法人樽前artyプラス
【イ ラ ス ト】子ども広報部「びとこま」、堀米和克・小河けい（NPO法人樽前artyプラス）
【紙面デザイン】堀米和克（NPO法人樽前artyプラス）
【編　　集】苫小牧市美術博物館、NPO法人樽前artyプラス
【発　　行】苫小牧市美術博物館（苫小牧市末広町3丁目9－7）

苫小牧市美術博物館の魅力を伝える

びとこま 29号

2021

2021年1月9日(土)～3月7日(日)

企画展

「総天然色！考古資料のあざやかな世界」

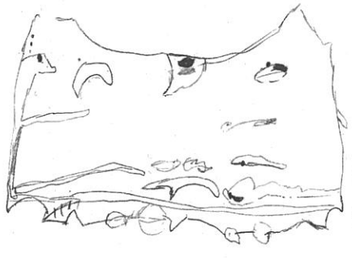
赤色―漆塗櫛 遺跡から出土するくしは現在のようにかみをとかすためではなく、まとめるためにかんざしのように使っていたと考えられる。くしが赤色にぬられていてこの赤色はうるしの木のじゅえきにべんがらという顔料をまぜてぬっている。

青色―ガラス玉 ガラス玉は古代エジプトや西アジアで製作され、中国を経て日本には、弥生時代ごろから入ったとされている。ガラス玉を色々見てみると青といってもうすい青やこい青がある。

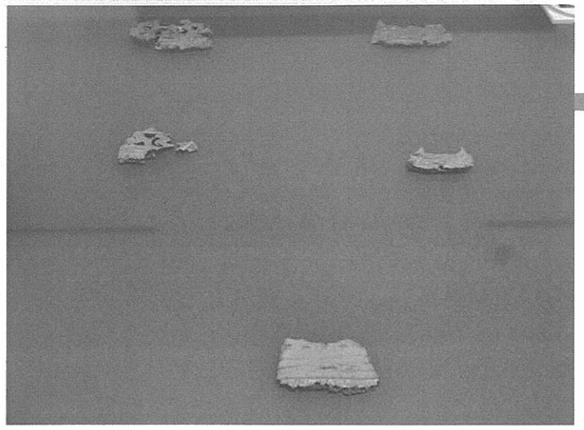
黒色―天然アスファルト せきぞくをやがらに装着する際や土器が割れたときの接着ざいとして用いられていることがあった。

（栗本帆夏）

【赤】…ベンガラやうるしを利用して色をつける。
【青】…ガラス玉やヒスイ、アオトラ石を使う。
【黒】…すすやアスファルト、黒曜石を使う。
【白】…骨、貝、角を使って、そうしょく品などを作る。**（綿貫里咲）**



【漆塗櫛】イラスト：三浦百葉



赤のコーナーにあった漆。ウルシの木からとれる樹脂です。本来は飴色をしていて、色を混ぜることで、黒や赤の美しい色合いを見せるそうです。

青のコーナーにあったガラス玉。古代エジプトや西アジアで製作され、中国を経て日本には弥生時代頃から入ったとされているそうです。

私は今回いろんな作品を見て、見たことがないものやきいたことがない名前の物もありました。すごく楽しかったです。

(板谷果穂)

◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶

びじゅつから見る赤色は、大地、血、炎、戦い、勝利など力強さや生命力を表す色、お祝いの色として古くからさまざまな場面で用いられてきました。太陽の色としても用いられ、エジプトの太陽神ラー、日本のアマテラスをしょう徴する色で中国からもたらされたいんよう五行の考え方では、四つの方位を青、赤、白、黒の名前を冠した四神が守護するとされ東はせいりゅう、南はすざく、西はびゃっこ、北はげんぶが配されています。一方、キリスト教絵画では、慈愛を表象するほか、赤はキリストの血やじゅんきょうをあらわすとされている。

(三浦百葉)

【朱塗壺】 イラスト：栗本百花

◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶◇◆○●△▲☆★◎◉▷▶

イラスト：小川さくら

【赤彩注口土器】 旧石器時代から縄文時代にかけて、人々は、赤、青、黒等の色を使い分けて、色による装飾を行っていた。その中でも赤はあざやかなもので、心を引かれるものである。今日見聞きして驚きを感じたものは「漆塗櫛」。恵庭が一大生産地だったのかも知れないと聞き、どのような作業風景だったのか想像することに胸をおどらせた。着色には「ウルシ」に顔料を混ぜたものを使っていたこともあったそうだ。

次は青…といってもやや緑色である。新潟周辺、イトイ川で生産されていた「ヒスイ」。まがたまによく使われる、綺麗な石だ。しかし、しっかりと青いものもない訳ではない。珍しい産物である。実に美しい。

次は白、黒だ。白は、石、貝、骨等から採取していた。黒は、着色としてはススがよく使われていた。秋田から天然のアスファルトを入手したりもしていた。それから黒曜石。道東からも取り寄せた。固く、ナイフに向いている石で、加工品も多く見つかっている。

古いものは３万年以上前から、新しいものだと100年程前まで、人々が色と密接に関係して生活してきた証として、考古資料は色鮮やかである。昔の人と生活は違えど、感性や想いは同じであり、それこそ人の美しさでしょう…。

(原田詢矢)

収蔵品展「色と絵～彩のひみつ～」

色でどう感じる？

この展示は、赤や黄の有彩色や白や黒の無彩色で描かれた絵を展示しており、色についての理解を深めるという内容だ。ちがう作者の同じテーマの絵もかざられている。赤から緑、緑から青、青から紫と、環になるイメージで展示されている。

(綿貫里咲)

遠藤 ミマン ｜《鳥と妖精と森》1977年

2021年1月9日(土)～3月7日(日)

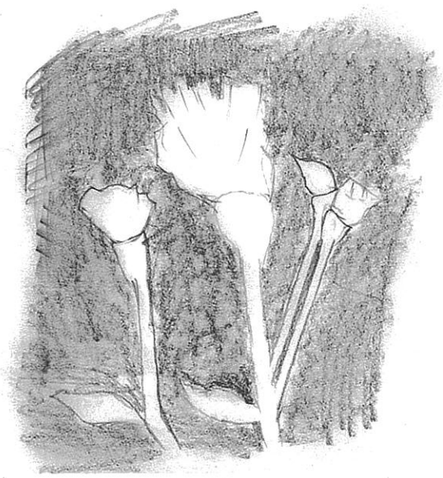
赤と黄色は、紅葉のようにみえ、秋の森をえがいているように感じる。よくみると鳥が10羽ぐらいいると考えられる。色々な感じ方のできる作品だと思う。

(栗本帆夏)

遠藤 ミマン ｜《藍の親馬仔馬》1975年

遠藤ミマンは、馬の親子を題材に変わりゆく故郷に対する郷愁の念など自らの心象を織り交ぜながら、自然賛歌や郷土愛に満ちた抒情的なタッチで自身の原風景を描いたそうです。

(板谷果穂)

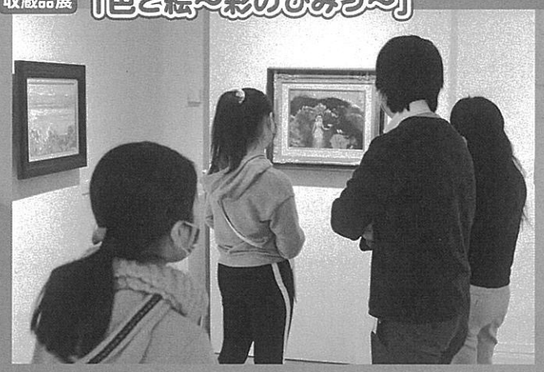


遠藤 ミマン ｜《あざみ》1974年

【遠藤ミマン／あざみ 1974年】 イラスト：分里心音

黒で塗りつぶされた背景の中で、黄色が少しだけ見えていて、暗闇から明るい場所に変わりそうだと思った。紫色は、本当は暗い色なのに、背景が黒だから、とても明るい色に見える。緑色は、暗い緑と明るい緑の２つの緑がつかわれている。絵をよく見てみると、表面がでこぼこしている。明るい紫が、だんだんピンクに見えてくる。

(分里心音)

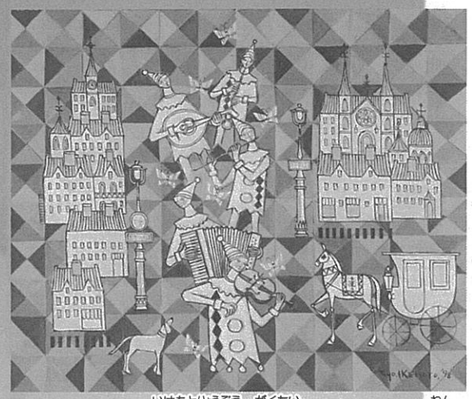


福井 正治　《ピエロ》制作年不詳

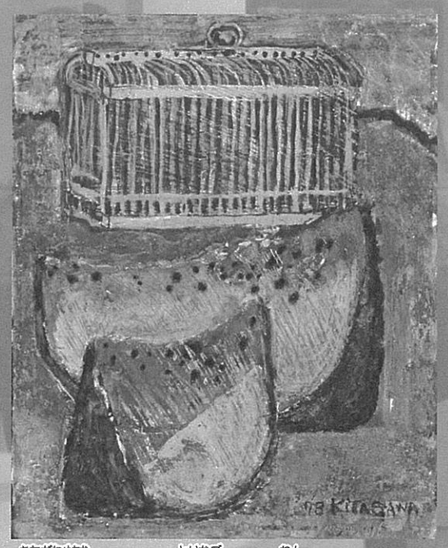
寂しそうな顔をしている。背景の緑が、まるで炎のように見える。ピエロのまわりに黒いなにかがついていて、暗い雰囲気をしている。ピエロは、ロープの上を一輪車で渡っているから、緊張が伝わってくる。誰かに呼ばれたみたいに横を向いている。　**(分里心音)**

池本 良三　《楽隊がゆく》1992年

少し機械的な面があると思う。直線的な線が多く、曲線もハッキリとしていたからだ。さらに、背景が三角でうめられていて、その色も少しずつちがう。その非現実的な世界観が魅力的だ。ファンタジー感があり、色使いが全体的にくすんでいる。屋根の色合いが緑、紫、緑、紫というようになっていて、こうした色使いからも異世界のような雰囲気が感じられるだろう。
もう一つ注目したいのが、絵の中央に位置する楽団たちだ。顔が笑ってはいるが、線の描き方や色使いをみると、楽しそうではなく、どこかつくりものの笑顔をうかべている。その笑顔に少し恐怖を感じるくらいだ。
(小川さくら)



【池本良三《楽隊がゆく》1992年】



【北川豊《スイカと鳥籠》1974年】

木下 知子　《コスモス》1975年

背景は、緑、ピンク、うす紫などの色が重ねてぬられていて、花が光を放っているようにみえる。背景はうすく、コスモスは厚くぬられているので、コスモスが目立ち、立体感が出ている。
(阿部多香子)

北川 豊　《スイカと鳥籠》1978年

人間の内面性を描く格闘の画家とも称された北川豊は、赤を多く用いたそうです。　**(板谷果穂)**

作品をくらべてみよう！！

【遠藤ミマン《藍の親馬仔馬》1975年】

遠藤 ミマン　《藍の親馬仔馬》1975年

背景は黄、ピンク、紫、藍。馬は藍、ピンク。たる前山を背景に寄りそう一組の馬の親子が描かれている。藍色を基調としながら、アクセントとしてピンク、黄、紫などが使われている。　**(綿貫里咲)**

渡辺 貞一　《サーカス》1958年

福井 正治　《ピエロ》制作年不詳

同じ一輪車の作品でも、渡辺貞一さんの《サーカス》という作品は、はい景が黒っぽい赤で、力強く感じました。一方で、福井正治さんの《ピエロ》という作品は、一輪車にのったピエロの顔と、はい景の深い緑色がさみしげに感じました。　**(野本遥)**

山中 現　《幼年時代の想い出Ⅱ》1985年

すき通った布のようなものの上に人のような白いものが乗っていて、それが風にふかれてういているようにみえる。この人の作品は4つ紹介されていて、4つの作品全てに、人のような白いものが登場している。
(阿部多香子)

【岩船修三《白馬》1972年】

岩船 修三　《白馬》1972年

背景は黄、ピンクが下地、青、緑を上からぬっている。馬は白。首をもたげ、ぬれたような優しいひとみでどこかを見つめる馬の横顔からは、みずみずしい感情をも感じられる。
(綿貫里咲)

岩船 修三　《夕映えの牧場》1972年

背景は赤、緑。馬は茶色。夕日に包まれて辺り一面が赤色に染まるしゅん間が描かれている。　**(綿貫里咲)**

能登 正智　《ニタッウナルペ》1992年

能登正智さんの作品は、他の作品とはちがい、ガラスを使ってえがかれていました。色にむらができていて、不思議なかんじがしました。　**(野本遥)**

山中 現　《流れ星》1981年

中心には、無彩色の山中現さんの作品が展示してありました。《流れ星》という作品は、人っぽいものが地球のじくに立って、流れ星を見つめているように感じました。**(野本遥)**

苫小牧ポートミュージアム行ってきたよ!

《苫小牧西港フェリーターミナル3F》

2020年9月5日(土)

イラスト：栗本百花

ふねによっては、だいよくじょうがあったり、レストラン、コンサート、ゲームセンター、からおけ、えいがかんがあるらしいです。おへやの中は、わしつもあったり、ようしつもあったり、わしつとようしつがまざったのもあるそうです。

ふとんがいっぱいある、ざこねとかだったけど、今のあたらしい船は、一人分のこべやだったり、1人ようのベットがかならずあるらしい。**(栗本百花)**

船の一番下に車やトラック、バイクなど入る所があり車は何台入るかと言うと113台でトラックは、150台くらい入るといっていました。そんなに車やトラックが入るのはびっくりしました。

(三浦百葉)

イラスト：野本遥

コンシェルジュの方にフェリーについて色々聞いてみた。

Q. 船はどれぐらいの大きさなんですか？

A. 約200mほどで、西港区ではさい大199mの船が入れます。

Q. 1年でどれだけの船がきますか？

A. 1年は分かりませんが1日では7せき出入りしています。(計算すると1年で2555せき)

Q. フェリーはどれぐらいの人が乗れますか？

A. 太平洋フェリーのいしかりだと、777人乗れます。

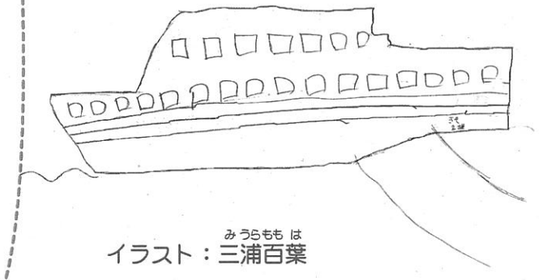
(栗本帆夏)

コンシェルジュの方にインタビューをした際に、フェリーについて分かったことを書く。

苫小牧港では、1日に7せきのフェリーが出入りしている。1日に7せきということは、1年に2555せきが出入りしているということだ。

西港区の中で一番長きょりの名古屋行きは、40時間行くまでかかるそうだ。フェリーの中にはエレベーターもあるそうだ。

(綿貫里咲)



イラスト：三浦百葉

苫小牧西港フェリーターミナルは、世界初の掘り込み式港。12年もの工事を行い、1963年に完成した。もし、港がなかったら、今の景色とはまったく違うものとなっていた。道内で1番利用されている港だ。他の道内の港と違うところは、ほかの港は、もとの地形をそのまま利用している。けれど、苫小牧の港は、人工的に地形を変えて、つくられたところだ。先人が努力してつくってくれたこの港を、これからも大切にしていこうと思った。

(分里心音)

今日は、港に名古屋行きの「きそ」という船がとまっていた。この船は、199.9mの大きさで、8かいだてなのだそう。そのうち1～4かいは、車やトラックを入れる場所で、残りが客室である。苫小牧港は、空港と合わせて、「ダブルポート」とよばれている。

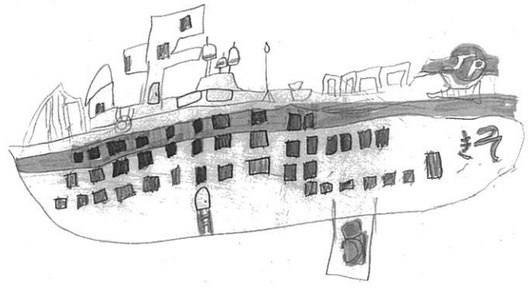
(阿部多香子)

1つ目は、みなとは全国とつながっているということです。なのでみなとは、みんなにあいされているんだなと思いました。2つ目は、みなとのけんせつを人々がおねがいし、みなとがほしかったから、大きなみなとを作り上げたという事です。しかも、工事は冬もおこなわれました。そして、人々は、長い年月をかけて、みなとを作ったので、人々は、みんな努力をしているんだなと思いました。

私は今回みなとについて調べて、もっとみなとの事がわかったし、人々の努力がよくわかって、みなとは人々の努力などで作られ、たくさんの人々にあいされているんだなと、あらためて感じました。

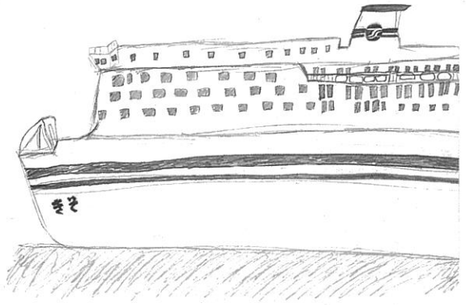
(板谷果穂)

イラスト：田野紗彩



昔は、イワシ漁がじびきあみでさかんにおこなわれていた。でも、じびきあみだと、遠くまでとりにいけないから、港がほしいと思っていた。1924年、林千秋という人が、ほりこみ港をつくりたいという文をつくった。そして、1951年に、港をつくる工事がはじまった。1963年港からはじめてふねが出港し、林千秋も完成した苫小牧港を見た。世界ではじめて、ほりこみ港ができたのはすごいと思った。

(野本遥)



イラスト：分里心音

フェリーターミナルに行ったことはあるが、ふねにのったことは一どもない。だけど、わたしのおじさんが、前ここではたらいていたから、よかった。おじさんがどんなしごとをしているかもわからないけれど、ようち園のえん足のときにフェリーターミナルに行ったからあえてうれしい。そして、なにより一ばんうれしいことは、おじさんが、家に帰ってくること。だから、こんどは、おじさんがのっていたふねにのってみたい。

(田野紗彩)

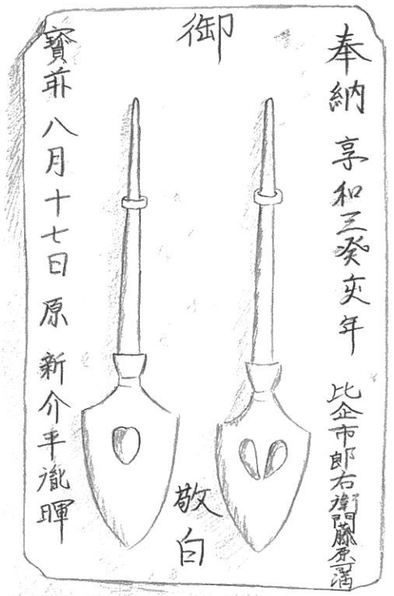
2020年10月10日(土)～12月13日(日)

企画展

八王子千人同心と蝦夷地

220年前一東京から北海道に100人の人々が渡った。彼らを「八王子千人同心」という。そのころ、鎖国をしていた日本に外国がせまってきた。あせった日本は蝦夷地（北海道）を守るため、八王子千人同心を送ったのである。また、なぞの多かった蝦夷地を開拓するようにも命じた。半分侍、半分農民というグループである八王子千人同心は、今回の目的にうってつけだった。

リーダーの原半左衛門と弟新介は慣れない土地での暮らしが安全なものであるようにお堂へ奉納した。この展示会では、原兄弟が奉納したと思われるわに口などが展示されている。しかし、その願い叶わず病人、死者が続出し、移住から4年後八王子千人同心は解散となった。 **(小川さくら)**



「原新介奉納扁額」

イラスト：栗本百花

八王子千人同心は220年前江戸(東京)からさむらいがえぞ地(北海道)に来た。その時日本は鎖国をしていた。八王子千人同心が来たのにはある理由があった。1つ目は、えぞ地を守るためだ。2つ目は、えぞ地を住めるようにすることだ。けれどもうまくいかず4年後に八王子千人同心はかいさん。

実は、2回目も八王子千人同心がやってきた。幕末、ペリーが日本にやってくる。それはねん料の保きゅうや休けいの場として使うためだ。

(栗本帆夏)

【二度目の蝦夷への来訪を果たした八王子千人同心】

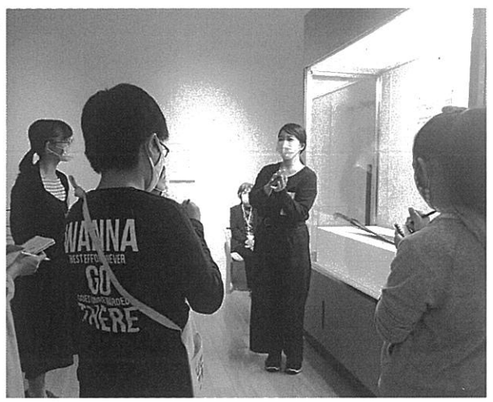
時は過ぎて50年後。幕末の日本に、ペリーが来日した。ペリー率いるアメリカ人は、鯨を求めて日本近海までやって来て、色々な物資補給のために開国をせまった。上陸をおそれ、八王子千人同心は、函館近郊に渡った。蚕を育て、絹糸をとる技術の発達したまちからやって来たので、守護、開拓に加え、養蚕も行った。その時は、温暖であったこともあったのか、開拓、養蚕共に成功。しかし、幕府が崩れたことにより箱館戦争がはじまり、侍であった八王子千人同心は戦争に巻き込まれ、死傷者も出た。その後、大半は故郷へ帰ったものの、蝦夷地に残った人もいた。その人らは、第一回や第二回共に、外国についての勉強や農業などを行ったり、旅館を作った者もいた。 **(原田詢矢)**

てんじ室には、2つのちずがあって、右のちずは、がいこく人がかいた物で、左のちずは、日本人がかいたちずでした。今と形がぜんぜんちがいました。私はこの2つのちずを見て、まだくわしく調べてないから、2つのちずは、そうぞうでかいたのかなと思いました。 **(板谷果穂)**

当時の蝦夷地には、日本でも分からないことが多かった。「寒い」「樽前山の火山灰のせいで農作物が作れない」などの理由で、八王子千人同心は一度解散してしまった。それから50年後、世界でクジラが流行した。外国の船がクジラをとろうと、日本の周りにやってきた。海防のため、また八王子千人同心は蝦夷地に来た。2回目は、暖かく農作物も育ち、とても良い環境だった。だが、箱館戦争が起こり、八王子千人同心の人々も巻き込まれてしまった。亡くなった人、戦後住み続けた人、さまざまな人がいた。 **(分里心音)**

ラッコの毛皮が高額で取り引きされるようになり、ロシア、イギリス、アメリカがラッコりょうを行うようになった。ロシアが千島列島をねらい、明和8年(1771年)に、ウルップ島などでラッコりょうを行ったロシア人がアイヌの長老を殺害し、アイヌ人としょうとつした(ウルップ島事件)。そのあと仲直りをした。 **(綿貫里咲)**

是恒さくらさんから聞いたクジラのお話



ふつう、人は口のまわりにひげがはえている。けれどもくじらは口の中にひげがある。ひげは縦に並んでいる。くじらは、魚と海水をそのままいっしょに口の中に入れ、魚をのみこむ。このとき、ひげにひっかからせる。くじらの大きさ…約20m～25m **(栗本帆夏)**

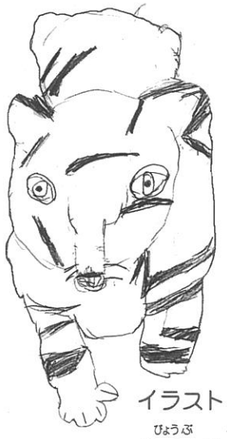
クジラの口の中のひげは、クジラは、歯がないから口の中のひげで、エビや小さい魚を食べている。へやの、はじから、はじまでの大きいクジラがいて、私とおなじくらいのが、大きいクジラにとっては、小さい魚なんだ。 **(栗本百花)**

2020年10月10日(土)～12月13日(日)

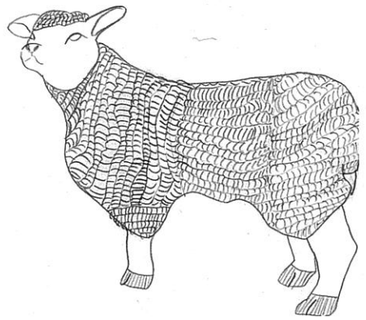
企画展

紙とアート 吉田傑のダンボールといきもの

この企画展は、その名のとおり、吉田傑さんがダンボールで作った生き物を展示するというものだ。使うダンボールは、着色をしないで、元々の色を生かして作るそうだ。 **(綿貫里咲)**



イラスト：栗本百花
《屏風の虎》2013年



イラスト：阿部多香子
《羊の親子(仔羊)》2017年

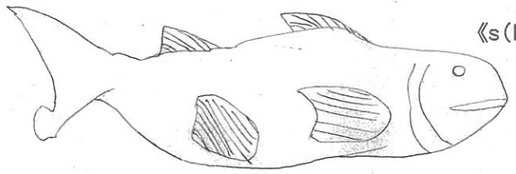
絵をかいてみたけれど、絵では表せないような、変わった質感をダンボールはもっていた。ダンボールをわのようにして、毛をつくっているらしい。 **(阿部多香子)**

エゾシカ
日本には1種類のシカ(ニホンジカ)がすんでいるがその中で北海道にすむものをエゾシカと呼ぶ。エゾシカは日本の他のちいきにすむものより大型で体重100kgを超すものもいる。 **(三浦百葉)**

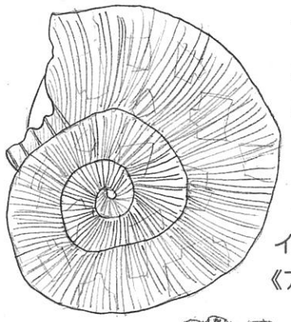
吉田傑さんにインタビュー

ダンボールを使って作品を作ろうと思ったきっかけは、自分でさわれるものが作りたかったからだそうだ。また、こわれても修理がすぐにできるからだそうだ。牛を作るのに、ダンボール40箱、木工用ボンド6kgを使ったそうだ。 **(綿貫里咲)**

骨ぐみを作り、ちぎったダンボールを小さくしたりして、牛の肉をつけていっている。はり方はボンドをうすくぬり、失敗したら、きったり、はがしたりしてやりなおす。作品はどんどん大きくなっていく。ダンボールを使い分けて、色のついているものや、水につけてはがしたりしてはったりしていると話していた。 **(栗本帆夏)**

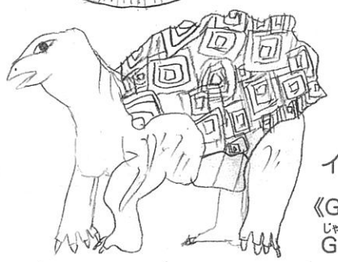


イラスト：三浦百葉
《s(h)ake!》2015年



アンモナイトは、やく6500万年前の白亜紀末期までいきていたタコやいかのなかま。 **(栗本百花)**

イラスト：野本遥
《アンモナイト》2019年



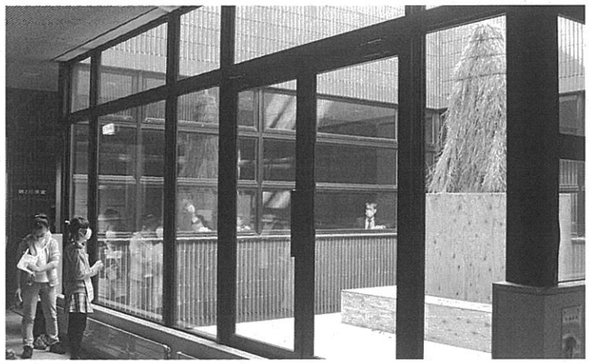
イラスト：田野紗彩
《Garapagos Giant Tortoise》2016年

ダンボールを使って、サケの表面をさいげんしている。全てダンボールでできた作品なのですごいと私は思う。ダンボールを縦に使ったり、はったりしている。美術博物館では18ぴきのサケが展示してある。 **(栗本帆夏)**

中庭展示 Vol.15 磯崎 道佳

「世界には塵ひとつない」

2020年10月10日(土)～12月13日(日)



「台はえらい人がのるもの」とみんなは言う。けれど、そのさくひんは、ほうきがのっている。

うえのほうにビニールぶくろがかかっていて、風がふくと、そのビニールぶくろが風になびいて、そのほうきは、少しおどっているようにみえる。大きくて、えらいのに、つるされているようなふんい気がする。

なにか、そのビニールぶくろに言っているようだ。そのうごきがとてもうつくしい。それをつかってそうじをしたら、すぐおわると思う。 **(田野紗彩)**

台の上にのっている大きなほうきは、えらい人のイメージだそうです。でも、上のほうに、ビニールぶくろがひっかかっている木のえだが2本あります。そのビニールぶくろが、ほのようになって、かぜにゆられています。ほうきは、その木のえだと糸でつながっているので、木のえだが風でゆれると、ほうきもうごいて、えらそうだけど、風でおどらされているようなかんじでした。 **(野本遥)**